

山田恵子の作品は、形態にリズムを持つ。それはフラクタルでもミニマルでもなく、動作する仕草を押し留めている訳でもない。各面が独立し、様々な空間を形成しながらも異なる表情を浮かべる。それは正に絵画が平面であるにも拘らず立体と化す動向に匹敵する。即ち、立体が平面に回歸するのだ。

しかし山田の作品のエッジの利いたソリッドな体躯は空気を切り裂いていくのではなく、軽やかに舞い続ける。それは江戸期の日本絵画で部屋の欄間に描かれる花鳥に匹敵する。その優雅さは床に据え置く作品であっても同様に、浮遊しているように感じさせる。即ち、重力という磁場を攪拌し見る者の平衡感覚を失わせていくのだ。

作品に鉄を素材として用いる場合、鉄が持つ重量感、鋭利なフォルム、レディメイドとしてのあり方、錆のテクスチャ、木や石と異なり完全に人間が加工しなければ生まれいずることが不可能な面を強調することが多々ある。しかし、山田はこのような鉄が持つ特徴を覆すようにウレタン塗装によって着色する。

浮遊する鉄塊は、着色することによってその密度を増しながらも異なる存在に変容する。それは物質感の変化ではなく、存在そのものの変容である。山田の作品は中が空洞であるように感じない。それどころか素材が鉄であろうと粘土であろうと木であろうと、着色することによって、浮遊することによって、重さではなく密度がより増していくのである。



しかし、山田の作品は鉄でなければならない。人間は古来、木彫、テラコッタのみならず鉄、ブロンズにより神々を形作ってきた。鉄はビニールやプラスチックといった完全な人工物は異なり、元は溶岩や火山といった自然の恵みから贈られてきたものなのだ。そのような鉄に対してウレタン塗装という完全な人工物によって保管が可能となる作品とは、何と現代の私達を指し示しているのであろうか。

何よりも山田の作品群に台座が必要ないのは、彫刻ではないことを知らせている。では絵画的かというところでもない。彫刻か絵画かという問いを発することは無意味なのだ。山田の作品が持つフォルムが人に近づかないことを望む。何故なら人間の形こそ不自由であり、我々はここから創造力を持って抜け出さなければならないのだ。そこに未来の我々の自画像の姿が潜んでいるのであろう。

